
傷

石子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

傷

【コード】

N5303E

【作者名】

石子

【あらすじ】

私は今日も笑顔で彼を見送る。奥さんのいる家に帰っていく彼を。

鋭利な薄いナイフで、一筋の切り傷をつけたような痛くはない。

だから、その傷には気付かない。

ただ、そこから血は流れ続ける。

私から、いろいろなモノを奪いながら、流れ出ていく。

「あ。もうそろそろ時間じゃない？」

少し前に、彼がちらりと時計を見たのを気付いていた。もちろんそんなことはおくびにも出さないけれど。

頃合を見計らって、今気付いたというように私は時計を見上げた。「もうこんな時間か。気付かなかったよ。でも、もう少しだけなら大丈夫だから」

彼はそんな風に言う。いつもそうだ。見え透いた嘘。帰るのが遅くなったら困るくせに。

「ほんとに？ だけど、早く帰らないと奥さんに怒られちゃうでしょ？ 娘さんも待ってるんだし。私とは会社でも会えるんだから、帰ってあげてよ」

につこりと、私は言った。

彼は少し申し訳なさそうな表情を浮かべた後、

「それじゃあ、今日はもう帰ろうかな」

言って、腰を上げる。

私から言い出してあげないと、彼はまだしばらく私の部屋に留まったことだろう。

それを彼のやさしさだと思って、愛しく思うのは馬鹿げているだろうか。

「気を付けて帰ってね」

玄関のドアを開けて、彼を送り出した。

ドアをパタンと閉めると、ほっとしたような寂しいような気持ちになる。いつもそうだ。

飲み終わったコーヒーのカップを洗う。二つ。

音がなくなった部屋の中。ほぼ無意識にテレビをつけた。どんな内容の番組が流れているのかなんて興味はないけれど、私には必要だ。

なにがきつかけだったか本当に思い出せないのだけれど、部署の違う彼から食事に誘われた時は単純に嬉しかった。仕事で何度か話したことがあるだけだったが、好感をもっていたから。

昔から、彼女がいる男の人は好きにならないようにしていたし、結婚している人を好きになるなんて、ましてや付き合うなんてとんでもないと思っていた。

多分、彼に奥さんがいることを知っていればこんな関係になることはなかっただろう。

今思うと、だからこそ、わざと、そのことに触れずに徐々に親しくなっていた。

彼も私と会うときには左手の薬指の指輪を外していたが、それを男のズルさだとは、私は思わない。

そんな指輪がなくなつて、二人でいる時間が増えるほど、なんとなく結婚しているんじゃないかって肌で感じる。それに気付かないフリをしていたのは私のズルさ。

ただ、やっぱり指輪が存在を主張していれば、きっと私はそれ以上仲良くなるうとは思わなかっただろう。

そんな不安定な綱渡りのような状況でも、だんだんと彼のことを知っていくのは嬉しかったし、二人で会って話しているとても楽しい。

私の家に来て、いつも彼は「溜まってる仕事を片付けたいから」なんて理由をつけて、泊まっていくことはなかった。それが、なにを意味するのかわからないわけではないけれど。

彼は、本当に私が気付いていないのだと思っていたようだ。

ある時、実は俺には妻子がいる、ということ打ち明けられた。君を騙すつもりはなかったんだ、君を愛している気持ちは本物だよ、これからもこの関係が続けていけないかな？

やっと私に打ち明ける気になったんだなあ、と無感動にそう思った。

嘘をつき通すこともできない気弱な愛しい人。

可哀想に。

今まで私に隠していたことに、ずっと罪悪感を感じていたのだから。

私はその告白に、傷ついたフリをした。どうして言ってくれなかったの、と責めた。そうした方がいいだろうと思ったから。ある程度怒ったところで、でも私だってあなたのことが好きだから仕方ないわね、と事態を収める。

だって、私は彼がいなくなったらきつと生きていけない。

打ち明けられたところで何も変わらなかった。子どもがいることまでは分からなかったが、もしかしたら、という思いはあった。

大丈夫。私はそんなところも含めて彼のことが好きだから。

相手に家族があると休日には会えない、なんて話を聞くことがあるけれど、それは私達にはあてはまらなかった。もともと休みが不規則な仕事だったし、休日出勤だと言えば彼の奥さんは特に疑わなかったらしい。二人で車で遠くに出かけたりして過ごした。普通の恋人同士となにも変わらない。

もちろんクリスマスなんかは一緒に過ごすわけにはいかないけれど。そんなことは大したことじゃないはずだった。

「すまないね。本当は、君といたいただけねど」
そう言う彼に、私は笑顔で言うのだ。

「そんなこと気にしないで。私、別にイベントとか気にしない方だし。別の日にまたご飯食べに連れてってね」

それを聞いて、やっと少しほっとしたように笑う彼。

本当に、そんなことは気にならないと思っていた。付き合い始めて一年目。

クリスマスの町を歩く恋人たちとすれ違うたび、気持ち が沈んでいくことに自分で驚いた。

今までだって、恋人のいないクリスマスを過ごしたことはあるのに。彼が自分の家族と楽しく過ごしているのだろうと思うだけで息が苦しくなって、家に帰るなりベッドに横になってそのまま眠りもせず、動きもせずに朝が来るのをまつた。

もちろんそんなことは彼に言わない。

きっと、やさしい彼のことだ。そんなことを言えば私のことを想って、私と別れようと考えるに違いない。

私のことを気にして、かどうかはわからないのだけれど、彼は職場であまり家族の話をしていないようだった。私も聞いたことがない。

仕事上、彼と話す機会はほとんどなくて、彼と同じ部署にいる私の友達が言っていたことだ。

私が彼と付き合っていることは誰にも知られていなかった。

一度だけ、彼が家族と一緒に歩いているのを見かけたことがある。休みの日だった。買い物に来ているのだろうか。

私も一人で買い物をしている時だったが、彼に見つからないようにさりげなく避けた。彼の方は私に気付くことすらなかっただろう。人通りの多い交差点で、人ごみに紛れてすれ違う。

私は目線を動かさずに前を見て歩いたけれど。

それでもはつきり見えてしまった。

楽しそうにしている彼。　可愛い奥さん。

あどけない笑顔の娘さん。

いっそのこと物凄くぶさいくな奥さんだったらよかったのに。
嫉妬なんてするつもりはない。だって、私は私で幸せだから。

でも……、と思う。

もしかしたら、奥さんも私という存在に気付いているのかもしれない。気付いていないわけがない、とも思う。

そう思うと、罪悪感よりは共感のようなものを覚える。

向こうはそんな風には思わないだろうけども。

彼が家族で歩いてきた光景を思い出す時、まず、誇らしげに彼の横を歩く奥さんが思い浮かぶ。私への当てつけのように。

奥さんから彼を奪う気なんてない。

どうしたいか、なんてわからない。

先は見えない。

それでも、私には彼が必要だし、彼を失いたくない。

だから、彼の重荷になるようなことは言わない。しない。嫌われたくない。

そして、今日も私は笑顔で私の部屋から出て行く彼を見送るのだ。

鋭利な薄いナイフで、一筋の切り傷をつけたような。

痛くはない。

だから、その傷には気付かないフリをしていられる。

ただ、そこから血は流れ続けている。

私から、いろいろなモノを奪いながら、流れ出ていく……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5303e/>

傷

2010年10月8日15時17分発行